

## 論文の内容の要旨

論文題目 子育ての視点からみた都市環境構築に関する研究  
—地域に展開される親子の環境への評価および認識に着目して—

氏名 趙 晟恩

近年急速な少子化の進展が深刻な課題となっているが、親の就労状況の多様化、子育てサービスの対応不足など社会全体としての子育てへの配慮不足による「子育ては大変である」という否定的なイメージが先行していることが出生率低下に歯止めがかからない要因のひとつであると推測される。

一方で先進事例として出生率の回復が見られる北欧諸国をみると育児休業や子育て経費負担などの財政的支援と同時に、保育所・保育ママ整備などの子育て支援サービス拠点の充実や親子にとって生活しやすい都市環境が計画され、サービスと建築計画が一体的に捉えられている。日本の現状では、子育て中の親へのサービスの面に関しては認証保育所等の新たな保育施設の拡充や延長保育、夜間保育の実施などが見られ、建築計画の分野においては保育施設個々に対する多くの研究や実践がなされているが、都市空間において生活環境に関しては子育て中の親の視点を反映した条例や政策は見当たらず、環境整備への試みには至っていない。

そこで本研究では、社会全体として子育てを支援する方策への知見を得るため、「子育て」の視点で都市空間がどのように利用され、評価されているか、具体的な問題の所在を明らかにすることを目的とする。このような知見の蓄積から実際の環境づくりにつながり、高齢者や障害者など福祉的観点が反映されたバリアフリー新法のような「子育て」の視点を取り入れた都市環境整備の試みにつなげることを考えている。

本論文は全6章で構成される。

第1章では、本論文の背景として、子どもをとりまく社会の現状および研究の目的、既往研究、位置づけ、論文の構成を明らかにしている。

第2章では、2006年に東京都多摩市多摩ニュータウン(以下多摩NT地区)にて、未就学児を育てている親(40名)を対象にGPS機能が搭載された携帯電話を貸し出し、「日常生活の中で外出する際に

気になるところの写真を撮影し、別紙のカードにその評価と撮影した理由を記述してください」と教示する。そこで、得られた写真 397 枚、記述 413 枚のデータをもとに、都市の中でどのような環境要素を認識し、利用しているかを明らかにした。そこで、記入されている文章を、評価の「対象」と「理由」に分け、親子の環境の利用状況を把握した。また、親が利用している子育て支援サービスにより、環境への認識がどのように差異が現れるかを検証している。その結果、長時間子どもを預けている、保育所を利用する親は都市空間を「移動」する場所としての視点で認識することが多いことが明らかになった。一方、子育て支援サービスの利用時間が短い、もしくは利用していない親子は都市の中の様々な要素で「遊び」を作り出している場面が見られるなど、より環境要素に対する積極的な利用が見られた。

第3章では第2章で行った多摩 NT 地区での調査は、「団地」という特殊な環境で行っていることから、さらに調査対象地域を同じ多摩市内の聖蹟桜ヶ丘駅周辺（以下聖蹟桜ヶ丘地区）、東京都世田谷区の三軒茶屋駅周辺（以下三軒茶屋地区）にて行った。追加の調査を行うにあたって、2006 年に行った多摩 NT 地区での調査手法を改善させており、その具体的な調査手法、調査対象地域の概要を述べている。また、第2章での知見（利用している子育て支援サービスの時間が短いほど環境要素の利用に積極性が見られる）を活かし、幼稚園や子育て支援センターを中心に調査対象者を募集し、調査を行った。本章では対象となる3地区の概要、具体的な調査手法、第4、5章での分析の概要を整理している。第4、5章では写真が撮影された場所ごとに写真を分類し、最も多く撮影された「歩行空間」、「公園」ごとに分析を行っている。「歩行空間」はすべての地区において最も多く撮影された場所であり、都市空間の全体的評価より否定的評価が多くされている。続いて多く評価されている場所である「公園」は概ね肯定的に評価されている場所である。地域により歩行空間や公園の整備状況は大きく異なることが想定されるため、場所ごとに分析を行う。

第4章では写真が撮影された場所のうち「歩行空間」を対象に地域ごとの認識および評価の差異を明らかにした。全地区において共通した傾向として、歩行空間は「移動」のみならず、子どもたちの「遊び」や地域住民との交流が行われる場としての意味があり、また、「遊び」の対象となるものは地域によりその種類に差があることを明らかにした。また、「移動」としての歩行空間は車、自転車などによる安全性、歩道の整備状況（路面の凹凸など）などの意見が多く、一定した評価基準があることが推察できる。

また、外出時の経路をプロットし三軒茶屋地区では数カ所の目的地を設定し経路選択を行うことで、往路と復路が異なることから経路選択の多様性がある傾向が見られた。一方多摩 NT 地区では自転車、車、電車などの移動手段を利用した外出が多く、「移動」空間として捉えることが多いことが明らかになった。聖蹟桜ヶ丘地区では経路選択においては両地域の混合したパターンが多く見られた。

第5章では「公園」で撮影された写真の評価内容から公園の利用状況を把握した。全ての調査対象者

において公園は子どもの遊び場として位置づけられているが、三軒茶屋地区では記述内容から具体的な遊び方や遊んでいる様子を描写しているものが多い。一方多摩 NT 地区では遊具の有無、種類、量など、遊具の存在に関する記述が多く見られた。また、地区ごとに、調査対象者により「公園」で撮影された写真の位置をプロットし、多くの親子により遊ばれる公園を抽出した結果、三軒茶屋地区では多くて2名の親子が重複するのみで、その数も少ない。また、重複する公園であっても利用している様子やその詳細には類似した傾向は見当たらない。一方多摩 NT 地区、聖蹟桜ヶ丘地区では多くて5名の親子が重複する事例があり、その数も多い結果となった。

第6章では、以上の結果から今後の都市空間の整備において、新しい環境をつくるのではなく、今あるものをどのように活用しつつ改善していくかに関する試論を述べている。

以上のように本論文は、子育て中の親子に着目し、主に歩行空間と公園の認識と評価、具体的な利用状況から今後の都市環境整備における指針を示すことができた。今の都市環境において歩道空間や公園などは個々の場所として認識されているが、親子の日常生活からは連続した場所としての意味があり、一体的に考慮した上での整備が必要であろう。